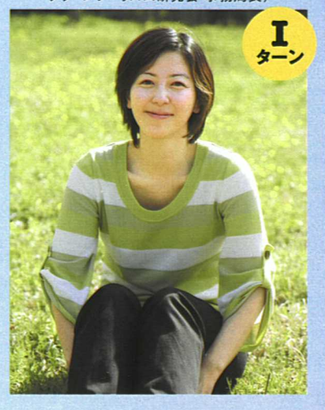
都会の暮らしを経験したからこそ、地方の豊かさに気が付いた——。NPO活動やカフェ、地方の外資系企業で輝く3人の女性に、U・Iターンを決意した理由や地域への思いを聞きました

取材・文／戸田かおり(植田さん)、真下智子(片桐さん)、写真／西島善和(植田さん)、林 直美(片桐さん、崎山さん)

私たち、ハッピーUターン・Iターンを実現しました！

学生時代に訪れた大分が第2の故郷に

植田淳子さん
(29歳・NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会 事務局長)



福岡〜盛岡〜関東〜奈良〜福岡〜大分

見渡す限り緑が広がる、大分県北部の宇佐市安心院(あじむ)町は、都市に住む人が休暇を利用して農家に宿泊し、交流する「グリーンツーリズム」の先進地域。その懸け橋となるNPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会で、事務局長を務めるのが、植田淳子さんだ。

福岡で生まれたが、転勤族だった家族と共に、九州から東北まで移り住んだ。安心院に魅せられたのは23歳、奈良県の大学院に通っていた頃。都市農村交流の研究の一環でグリーンツーリズムに参加するため、奈良から原動機付自転車をフェリーに乗せて海を渡った。2週間の休暇で実に11軒の民家に宿泊。大学院2年生の夏には1カ月間も住み込み、すっかり安心院のファンになった。

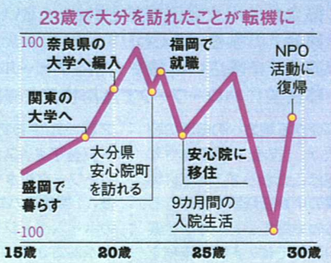
「安心院では、『農業文化を次世代までつなげたい』と、町民の想いが一つになっている。都市・福岡に生まれて様々な場所に暮らした私の経験を生かして、いつか安心院に恩返しをできないだろうか」。次第に、そんな思いが芽生えていた。

その〝いつか〟は、意外と近い未来にやってきた。就職氷河期だった02年、念願だった地域活性に関する雑誌を発行する福岡の出版社に就職。社会人生活のスタートを切った矢先、「グリーンツーリズム研究会をNPO法人化して立ち上げるので事務局員として来てほしい」という声がかかった。希望していた職を得て、これからという時期の誘い。当時は事務局長を引き受ける自信がなく、社会人経験も少ないまま地方に転職することに植田さんは迷った。しかし「安心院に恩返しをするチャンス。私が持つ都市の視点を生かして、安心院の役に立てるのなら」と転職を決めた。

Iターンしてから約5年。実は昨年、髄膜脳炎という病に倒れ、9カ月間の病床生活を送った。それでも安心院の人々は、植田さんの回復を待ち、また温かく迎えてくれた。

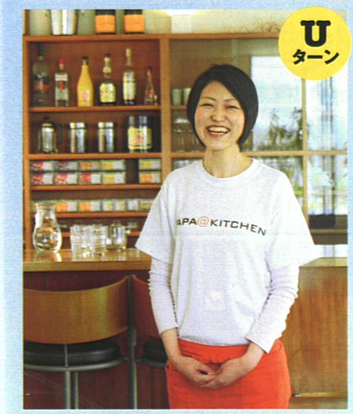
「Iターン成功の秘訣と言えるか分かりませんが、地元のお母さん・お父さんたちと溶け込んで、農業文化の普及という同じ目標を持てたことが良かったのかも。10年後に自分がどこにいるか、まだ想像はできませんが、今はこの場所と仕事、そして仲間たちの笑顔が私の宝物です」

23歳で大分を訪れたことが転機に



故郷だから実現した、夢の家族カフェ

片桐留美さん
(31歳・PAPA@KITCHENスタッフ)



岐阜〜東京〜アメリカ〜東京〜岐阜

恵那山や御嶽山など北アルプスに囲まれた高台に佇む小さなカフェ。店内は木の温もりにあふれ、窓から差し込む穏やかな日差しが心地いい。このカフェを両親とともに営むのが片桐留美さん。「おいしい空気が元気の源。今になってその素晴らしさを実感しています」

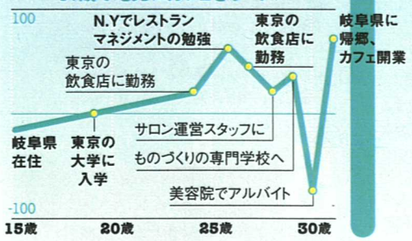
そんな片桐さんは「とにかく憧れの東京へ出たかった」と、故郷・岐阜県の高校を卒業後東京の大学へ。3年生のとき、和食ダイニングでアルバイトをしたことが転機となった。接客業や空間創造、飲食店経営の面白さにのめり込み、卒業後に渡米。1年間ニューヨークのレストラン専門学校で飲食業について学び、帰国後は東京のオーガニックレストランで働きながら、経営に関してさらに知識を深めた。

「東京では友人とルームシェアをしていたので、多くの友人を呼んでは料理を作ってもてなしていました」。慌ただしい生活に疲れたとき、田舎に帰って元気になる料理が食べたい…そんな願いに応える場所を東京に作ろうと決意。しかし資金的な壁は想像以上に高く葛藤が続いた。

そんなとき、シェフ経験のある父親が母親と地元でカフェを開くと聞く。〝ちょっと手伝うだけ〟と、オープン直前に帰省したが、メニューから店内の調度品まですべて手がけた。「手伝ううちにやりたいことが増えてきて、それを思い通りにできる充実感はこれまでに感じたことのないものでした」。結局そのまま両親とともに働くことに。

「東京だとか恵那だとか、大切なのは場所じゃない。やりたいことを自分らしく表現する場があることが、一番重要だったんです」。東京ではすぐに手に入る食材も、車で遠方まで仕入れに行かなければならない。しかしそれ以上に、地元にしかないものがたくさんあることに気づいた。「ここの野菜のおいしさには驚きました。今まで当たり前に食べていたものなのに、離れてみて初めて本当のおいしさに気付くんですね」。最近東京の仲間が料理を食べに来店。「ここでも彼らにエネルギーをチャージするオアシスになれるんです。様々な土地で様々な経験をしてきたからこそ、ここでの時間の流れが心地いいと感じられる。今が一番自分らしいんじゃないかと思いますね」

31歳で地元にカフェをオープン



英語一筋！派遣を経て地元企業で輝く

崎山いづみさん
(35歳・レジャー・英文会計)

浜松〜大阪〜浜松

「程よくのんびりしているのがここの魅力。浜松駅に降り立った瞬間に、歩く速度が遅くなったなって分かりました」。そう微笑む崎山いづみさんは26歳のとき、働いていた大阪市から故郷・浜松市に戻った。

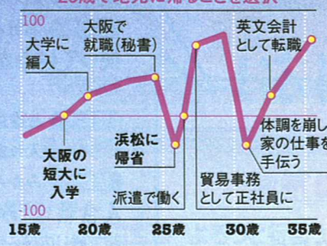
大阪の大学を卒業後、大阪の物流会社に秘書として就職。「簡単には戻れないプライドのようなものもありました。でも25歳になって、友人がどんどん地元に帰り始めたんです。私も一生都会で生きるのかと考えたら、当時はそこまでの自信はなくて、戻ることを決めました」

現在は浜松市内の外資系企業で英文会計の職に就くが、戻ったばかりの頃は「希望の仕事に就けるのか」と不安だった。大学で勉強した英語を生かせる仕事を探すが、求人は少ない。派遣で研究機関のスタッフとなり、1年半後、貿易事務として地元企業に就職。「基本給が新卒当時よりも1万円下がって、都会と地方の違いを感じました」

それでも、熱心な働きぶりが認められ、給料は除々にアップ。忙しさから体調を崩し、一時は家業の経理を手伝うが、紹介予定派遣を経て、32歳で現在の会社に正社員で転職した。

決め手は、英語という専門性。「『英語に触れる仕事をしたい』と目的が一貫していたことが、転職時に信頼されたのだと思います。都会でしかできない仕事だと思いがちだけど、地元ならではの周囲の協力もあっていい仕事に恵まれました」

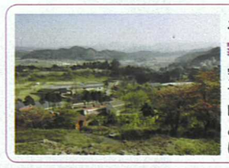
26歳で地元に帰ることを選択



大阪と地元では、仕事に関する習慣や文化にも違いがあると発見。大阪では私服で通勤し、会社で制服に着替えていたが、「車社会の浜松では〝制服通勤〟も多い。最初は驚きましたが次第に慣れて、制服のままスーパーに立ち寄ったことも(笑)」。会社帰りに近所の大学の公開講座で英語を勉強したり、ジムで体を鍛えて同僚とマラソン大会に出場したりと、地元での〝自分磨き〟を楽しんでいる。

休日は同僚や高校時代の友達と過ごすが、「大阪時代の友人とも頻繁に連絡を取り合い、毎年旅行を楽しんでいます。大阪で様々な地方から集まった仲間と過ごした経験が、視野を広げてくれた。転職をしても周りにすぐなじめるようになったし、どこでも生きていける自信が付きました」

お気に入りスポット



家族旅行村あじむ展望台(大分県宇佐市)

安心院盆地、由布、鶴見岳などを一望できる展望台。「安心院に暮らし始めた頃の家がここから見えるんです。疲れたときや迷ったときも、ここに来ると前向きになれます」

お気に入りスポット

武並神社(岐阜県恵那市)

実家の近所にあり、小さい頃はお祭りがあるとよく出かけていた。「今ではここの静かな空気に包まれると心が無になり、自然体の自分と向き合えてすべてのことに感謝できます」

ひとり時間スポット

浜松市立城北図書館

本が好きな崎山さん。「大阪にいたときも、近所にあった大きな図書館に通っていました。ここは建物が比較的新しくて明るく、本や雑誌、DVDが豊富なので、気に入っています」